

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13266

研究課題名（和文）被害者のエージェンシー認知に基づく被害者理解フレームの検討

研究課題名（英文）People's understanding of victims based on perceived agency

研究代表者

橋本 剛明（Hashimoto, Takaaki）

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：80772102

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：他者からの危害を受けた被害者について、人々はどのような印象を形成するのか。本研究では、被害者が事後的に、加害者を非難するなどして主体的に行動する様子を提示することの効果を検討した。複数の実験を通して、主体的にふるまう被害者は基本的に好意的に評価される傾向があり、共感や支援の対象となりやすいことが分かったが、その一方で、起きたことの責任の一端が被害者にもあると見なされる「被害者非難」の対象にもなりやすくなるという可能性が提起された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「か弱い存在」というイメージに反するような主体的行動を示す被害者が、人々からポジティブに受け取られる傾向があり、それが共感や被害者支援につながるという可能性を実証的に明らかにした点に意義がある。また同時に、主体的な被害者が被害者非難を生じさせる可能性を示したことで、被害者への二次被害につながる心理過程の理解に資する知見を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：What impressions do people form about victims who have been harmed by others? In this study, we examined the effect of victims acting proactively after the victimized event, for example, by blaming the perpetrator. Through experiments, I found that victims who act in such agentic manner are generally evaluated favorably and are more likely to be the target of sympathy and support. Meanwhile, data also suggested that agentic victims may become target of victim blaming.

研究分野：社会心理学

キーワード：被害者イメージ エージェンシー 心の知覚 公正 被害者非難 共感

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、対人的な侵害場面 (interpersonal transgression) における被害者に対する人々の認知や判断を検討対象とした。人々が苦しんでいる他者の姿を知覚した際、一般的な反応としては共感の喚起や支援への動機づけがみられる (e.g., Batson, 2010)。しかし、被害者の特性やふるまい方によっては、共感や支援の対象とみなされにくくなってしまふ場合があり、被害者側への責任帰属や非難 (i.e., victim derogation) が生じることが知られている。被害者への支援を促進ないし阻害する要因や認知プロセスを解明することは重要な課題であるが、本研究課題では、被害者の心的特性に関する知覚が果たす役割に着眼し、その構造と帰結を明らかにすることを目指した。

それでは、人々は、被害者のどのような心的特性に注目し、被害者への理解や評価を行うのか。人々が「被害者」という存在に対して持っているイメージは、例えば「か弱い被害者」という役割像を伴う。ここでいう「か弱さ」や「脆弱さ」という特性は、社会心理学の「心の知覚 (mind perception)」研究におけるエージェンシー (agency) の欠如という観点で概念化ができる (Schein & Gray, 2018)。エージェンシーとは、人々が他者の「心」を推論する際に用いられる基本的次元のひとつであり、人が自らの欲求や意志に従って行動でき、状況や環境に働きかけることができる程度に関する特性を指す (van Dijke & Poppe, 2006)。具体的には、主体性や意志の強さ、自発性や自己制御、身体的・精神的頑健性などの要素が寄与する。そして、先行研究では、非道徳的な行動をとった加害者はエージェンシーが強いと知覚され、相対的に被害者は非エージェンティックな存在であると見なされることが報告されている (Gray & Wegner, 2009)。これは、他者の資源や価値観に脅威を与える「強者」とそれを被る「弱者」という状況的な関係性を越えて、人間本来の「強さ」や「弱さ」の特性をあてはめて解釈されることを表している。そして、被害者は、エージェンシーを低く見積もられることで、責任を免れ、同情や支援が向けられやすくなるということが議論されている。

2. 研究の目的

本研究課題では、上記の理論的想定をベースに、先行研究を越えて、さらなる問いへの展開を試みた。先行研究においては、エージェンシーの帰属が侵害者への責任判断を強めるという点が強調されており、被害者のエージェンシーが低く知覚されることがどのような意味を持つのかについては、具体的な検討がなされていない。被害者にとっては、貶められた「地位」を回復することは達成すべき目標となり (Shnabel & Nadler, 2008)、そのための手段として、加害者への非難や抗議を行うなどして自らの意志を示そうと行動することも多い。その結果、被害者のことを「か弱い被害者」ではなく「強い被害者」と認知するとき、人々は被害者に対してどのような印象を形成するだろうか。また、それは、被害者を支援しようという意図に影響するだろうか。本研究では、そのような問いのもと、被害者が事後的にとる行動が、被害者のエージェンシー特性の知覚や、脆弱さの特性知覚に与える影響について明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

上述の目的を達成するため、主たる実証研究として下記の2つの実験を実施した。いずれの実験でも、仮想的シナリオのなかでの被害者のふるまいを操作して実験参加者に呈示し、被害者への印象評定などを求めた。

(1) 実験1

クラウドソーシングにより参加者を募集し、289名を対象にオンラインで実験を実施した。参加者には、ある人物が自転車に衝突され重傷を負うという仮想シナリオを呈示した。そのなかで被害者が事故に関するインタビューに答える様子を描写し、発言内容を次のように操作した。被害者のエージェンシーを強調した条件 (以降、エージェンシー強調条件) では、被害者が対応を専門家に相談し、加害者などの責任を問いたい旨を発言した。対照条件として、被害者が自らの被害経験や苦難を強く吐露する条件 (以降、経験強調条件) と、起こったことを淡々と説明する条件 (以降、統制条件) の2種類を設け、計3条件のシナリオのいずれかひとつを参加者は目にした。

シナリオ呈示後、参加者には、被害者のエージェンシー特性の知覚を「意志が強い」などの項目で、脆弱さの知覚を「か弱い」などの項目で尋ねた。また、被害者への共感や同情をおぼえる程度も尋ねた。

(2) 実験2

研究1の結果を踏まえ、次の実験を実施した。調査会社のサンプルを対象にオンラインで実験を行い、720名の回答を得た。研究1と同様の自転車事故のシナリオに加えて、職場でパワハラを受けた個人が失業する事例と、駅のホームで別の乗客に押されて負傷する個人の事例を含む、計3種類の事例を使用した。実験操作は研究1を踏襲し、被害者が自らのエージェンシーを強調する発言を含む条件、被害経験を強調する発言を含む条件、および事態の説明のみを行う条件のいずれかを参加者に呈示した。

シナリオ呈示後に、参加者には被害者に対する印象や態度の回答を求めた。研究1と同様に、エージェンシー特性知覚、脆弱さ知覚、共感について測定した。加えて、エージェンシー特性と概念的に関連する男性的ステレオタイプ特性(「自己主張が強い」など)の10項目、被害者の落ち度や責任について判断を求める被害者非難の4項目、そして、被害者への支援意図を測定するため情緒的・道具的なサポートを行うことへの動機づけを計3項目で尋ねた。

4. 研究成果

(1) 実験1の成果

まず、被害者のエージェンシーの知覚について分析したところ、実験操作の効果が認められた(図1参照)。エージェンシー強調条件では、他の2条件に比べて、被害者のエージェンシーが高く知覚されていた。また、エージェンシー強調条件では、被害者の脆弱さが他の2条件よりも低く知覚されていた(図2参照)。そして、被害者への共感の程度についても操作の効果が認められ、エージェンシー強調条件と経験強調条件では、ともに統制条件よりも強い共感がみられた(図3参照)。

次に、操作による共感への効果をエージェンシー知覚が媒介するか、パス解析で検討した(図4参照)。その結果、エージェンシー強調条件で被害者への共感が高まる効果は、エージェンシー特性の知覚により完全媒介されることが示された。一方で、エージェンシー知覚は、被害者が脆弱だという知覚を弱めており、それ自体は間接的に共感を低下させる効果もみられた。

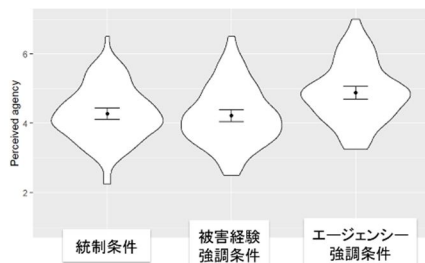


図1. エージェンシー特性知覚の条件ごとの回答分布

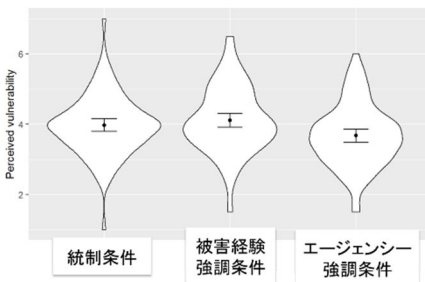


図2. 脆弱さの知覚の条件ごとの回答分布

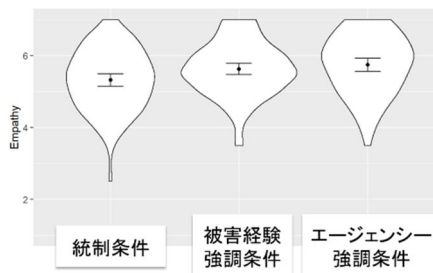


図3. 共感の条件ごとの回答分布

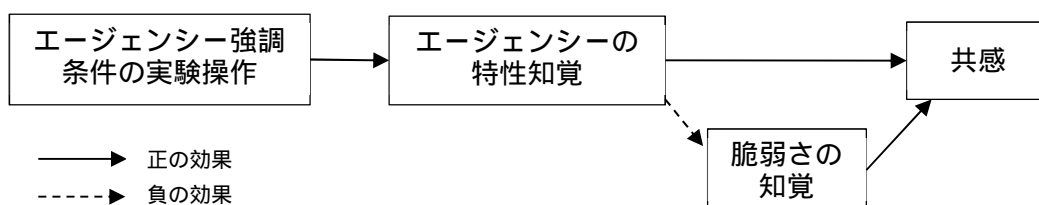


図4. 変数間の関係性に関するパス解析結果

以上より、被害者が自らのエージェンシーの高さを周囲に印象づけるような対応を示すことは、共感を低下させず、むしろ促進することが分かった。意志が強く、主体的に問題解決に取り組む被害者像に、人々は好意的な印象を持つことが示唆された。しかしその一方で、エージェンシー知覚は、被害者が脆弱な存在ではないという知覚を弱めることにもつながっており、それが共感や被害者支援にマイナスに働く可能性も示唆された。主体性をもって能動的に活動する被害者は一般には好意的に受けとめられる一方で、「か弱い被害者」像には必ずしも一致しないそのような行動が、共感を生みにくくもするかもしれない。そのような知見が得られたことが、実験1でみいだされた成果である。

(2) 実験2の成果

実験操作が各要因に与えた影響を分析したところ、男性的ステレオタイプ特性に関して効果が確認された。3種類の被害事例の違いによらず、エージェンシー強調条件の被害者は、他2条件に比べて、より男性的なステレオタイプ特性にあてはまる人物だと評価されていた。

次に、各要因間の影響関係を検討するためにパス解析を行った(図5参照)。エージェンシー特性知覚と脆弱さ知覚が、ともに被害者への共感を高める方向に予測しており、これは実験1に通ずる結果である。その一方、興味深いことに、男性的ステレオタイプ特性の知覚は被害者非難を強める方向に予測していた。そして、共感は被害者への支援意図を高め、被害者非難は支援意図を低下させるという関係性が認められた。

実験2では、主体的な対応をとる被害者について、伝統的な男性的ステレオタイプ特性にあてはまるという印象形成がなされる点が示された。そして、実験1の結果を拡張する知見として、被害者の特性認知が、共感だけではなく被害者非難も規定するという点、さらには、被害者へのサポートの意向を左右する点が明らかになった。被害者の主体的な行動が、共感を呼び、支援の行動に至る道筋が確認されたが、同時に、被害者非難を介してサポート抑制にもつながるという潜在的な可能性があることが分かった。

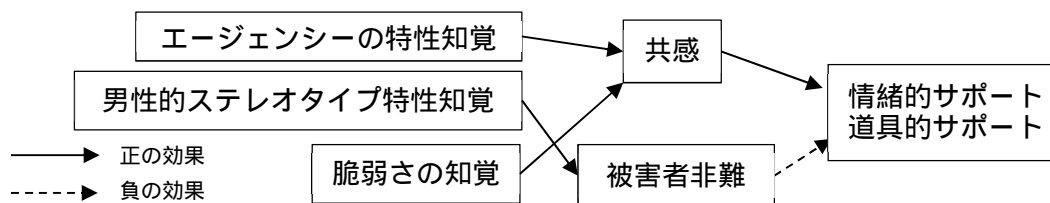


図5. 変数間の関係性に関するパス解析結果

(3) 成果のまとめ

本研究課題の特色は、エージェンシーという人間の「心」を構成する中核的な要素を軸に、被害者理解のメカニズムを解明しようとする点にある。エージェンシーは、従来、侵害者への責任判断の規定因として検討されていた側面が強いが、本研究を通して、それが被害者への人々の反応も規定する重要な要因であることを示すことができた。実施したふたつの実験を通じて、侵害事象が発生したあとに被害者が呈する行動が、エージェンシー関連特性の印象評価を左右し、それが被害者への共感や支援を促進することが明らかになった。

さらに、エージェンシー特性が被害者非難ともリンクすることを示せた点の意義は大きいと考える。なぜなら、状況の当事者である被害者がとる行動と、それを知覚する第三者の判断とのあいだに軋轢が生じうることを指摘する結果だからである。被害者が選択する行動方略によっては、被害者自身の目標(e.g., 尊厳回復)と周囲の人々による印象評価(e.g., 「被害者は我が強い」)が齟齬を生み、然るべき支援が為されないといったことにつながる可能性がある。本研究の知見は、そのように被害者への二次的被害を生みかねない心理的過程の解明に資するものである。今後は、個人としてではなく集合的に行われる抗議や、ソーシャルメディア上で展開されるコミュニケーションなどを題材にした発展的な検討が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 8件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Shimizu Yuho, Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 13
2. 論文標題 Influence of Contact Experience and Germ Aversion on Negative Attitudes Toward Older Adults: Role of Youth Identity	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 829742
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2022.829742	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 25
2. 論文標題 Are the powerful retributive, forgiving, or both? The moderating role of power on people's responses to norm violation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 391 ~ 405
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ajsp.12501	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Tham Yukari Jessica, Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 185
2. 論文標題 Who incurs a cost for their group and when? The effects of dispositional and situational factors regarding equality in the volunteer's dilemma	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 111236 ~ 111236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.paid.2021.111236	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 清水佑輔・ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり	4. 巻 92
2. 論文標題 象徴的障害者偏見尺度日本語版 (SAS-J) の作成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 532 ~ 542
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.20208	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり	4. 巻 37
2. 論文標題 多様な精神障害に対する人々の認知：ステレオタイプ内容モデルに着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 36～42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14966/jssp.2012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tham Yukari Jessica, Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 25
2. 論文標題 Social rewards in the volunteer's dilemma in everyday life	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 117～125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ajsp.12472	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 清水 佑輔、橋本 剛明、唐沢 かおり	4. 巻 28
2. 論文標題 ギャンブル障害というラベリングがもたらす否定的態度への効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 161～167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11225/cs.2020.063	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Fukumoto Miyako, Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 17
2. 論文標題 Perspective-taking mediates the effect of Victims' personalities on forgiveness	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Human Environmental Studies	6. 最初と最後の頁 17～24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.17.17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tham Yukari Jessica, Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 151
2. 論文標題 The positive and negative effects of justice sensitivity and justice-related emotions in the volunteer's dilemma	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 109501 ~ 109501
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.paid.2019.07.011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanibe Tetsushi, Hashimoto Takaaki, Tomabechi Tobu, Masamoto Taku, Karasawa Kaori	4. 巻 10
2. 論文標題 Attributing Mind to Groups and Their Members on Two Dimensions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 840
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2019.00840	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanibe Tetsushi, Hashimoto Takaaki, Tomabechi Tobu, Masamoto Taku, Karasawa Kaori	4. 巻 10
2. 論文標題 Attributing Mind to Groups and Their Members on Two Dimensions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 840
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2019.00840	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Cova Florian, Olivola Christopher Y., Machery Edouard, Stich Stephen, Hashimoto Takaaki ほか	4. 巻 34
2. 論文標題 De Pulchritudine non est Disputandum? A cross-cultural investigation of the alleged intersubjective validity of aesthetic judgment	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Mind & Language	6. 最初と最後の頁 317 ~ 338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/mila.12210	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 橋本剛明
2. 発表標題 公募シンポジウム 「社会生活におけるPositivityのネガティブサイド」 話題提供
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Power and apology affects aggression toward a norm-violator: Analysis using the voodoo doll paradigm
3. 学会等名 14th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Justice beliefs, intervention, and apology affect people's attitudes toward target of injustice
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shimizu Yuho, Hashimoto Takaaki, Karasawa, Kaori
2. 発表標題 A preliminary analysis of the factors related to negative attitudes toward elderly people
3. 学会等名 11th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tham Yukari Jessica、Hashimoto Takaaki、Karasawa Kaori
2. 発表標題 Who incurs a cost for her group and when? The effect of justice sensitivity and previous interactions with other members on people's behavior in a volunteer's dilemma
3. 学会等名 2021 Society for Personality and Social Psychology Convention
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Numata, T., Asa, Y., Hashimoto, T., Karasawa, K
2. 発表標題 Gender differences of emotion perception and subjective feelings induced by animated expressions of a non-human virtual agent
3. 学会等名 2021 Society for Personality and Social Psychology Convention
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 スキルを必要としない協力行動は女性が行う傾向にあるのか？コストリー・シグナリング理論に基づいた検討
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 ギャンブル障害者への否定的態度の軽減を目指して：ラベリングがもたらす影響の包括的検討
3. 学会等名 日本健康心理学会第33回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水佑輔・ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 日本における障害者の象徴的偏見を測定する尺度の開発
3. 学会等名 日本社会心理学学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 日常的なボランティアのジレンマ状況における対人認知
3. 学会等名 日本社会心理学学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 How do people view various mental illnesses? A preliminary analysis to classify the stereotype of illnesses into four categories using the Stereotype Content Model
3. 学会等名 59th Annual Conference of Taiwanese Psychological Association
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋本剛明・ターン有加里ジェシカ・唐沢かおり・田井光春
2. 発表標題 『データ駆動型社会』に対する人々の態度構造
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹部成崇・橋本剛明
2. 発表標題 他者の善行を目撃したときに心を動かされやすいのはどのような人か？ - 勢力感の個人差とモラル・エレベーションの関連の検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 How people evaluate volunteers and shirkers in the volunteer 's dilemma? The effect of perceived cost of volunteering
3. 学会等名 2020 Society for Personality and Social Psychology Convention
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本剛明・唐沢 かおり
2. 発表標題 道徳ジレンマ判断に行為者性と自己制御が与える影響：マウストラッキングによる意思決定過程の検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 General/personal Just World beliefs as determinants of attitudes toward victim of perpetration
3. 学会等名 International Convention of Psychological Science 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tham, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Egoistic motives of concerning injustice for others: Justice sensitivity and self-consciousness
3. 学会等名 2019 Society for Personality and Social Psychology Convention
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷辺哲史・橋本剛明・苜米地飛・正本拓・唐沢かおり
2. 発表標題 集団の実体性が集団への心の帰属に与える影響
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第65回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本剛明
2. 発表標題 「心」の概念工学（ワークショップでの話題提供）
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 ケノン・M・シェルドン、トッド・B・カシュダン、マイケル・F・スティーガー、堀毛 一也、金子 迪大	4. 発行年 2021年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 608
3. 書名 ポジティブ心理学研究の転換点（分担翻訳）	

1. 著者名 唐沢かおり 編（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 250
3. 書名 社会的認知 現状と展望	

1. 著者名 戸田山 和久、唐沢 かおり、橋本 剛明、鈴木 貴之、渡辺 匠、太田 紘史、遠藤 由美、島村 修平	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 概念工学 宣言！	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------